
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 69 2024. 9

北大総合博物館ボランティアの会 2024年度(第22回) 総会報告	-----	在田 一則	1
講演「ゴジラ音楽と緊急地震速報チャイム」を聴いて	-----	石川 弘晃	3
ドキュメンタリー映画「新渡戸の夢」を鑑賞して	-----	橋本 修一	4
大雪山産クモイリンドウの発見と命名の経緯	-----	吉中 弘介	5
ポプラチェンバロ&バロックアンサンブル演奏会	-----	松田 祥子	8

総会報告

北大総合博物館ボランティアの会 2024年度(第22回) 総会報告

ボランティアの会会長 在田一則

北大総合博物館ボランティアの会第22回総会およびビデオ観賞会が2024年5月31日(金)に総合博物館1階「知の交流コーナー」が開催されました。以下に簡単に報告いたします。

総会 (13:30~14:00)

総会は11名が参加して、星野さんの司会で行われました。会長挨拶の後、以下の2023年度活動報告および2024年度活動計画の提案があり、承認されました。

1. 2023年度(2023年4月1日~2024年3月31日) 活動報告

(1) 総会と講演会の開催

第21回総会 2023年5月26日(金)

講演会: 首藤光太郎さん(北大総合博物館助教)

「北海道で始まった水草研究」

なお、第18回総会(2020年5月)、第19回総会(2021年5月)および第20回総会(2022年5月)はコロナのため中止でした。

(2) ボランティア談話会の実施

2023年度は実施しませんでした。

(3) 博物館に押しかけよう会の実施

第28回: 2023年4月22日(土)、北海道博物館、8名参加

第29回: 2023年10月27日(金)、円山動物園、16名参加

(4) ボランティアニュースの発行

ボランティア ニュース第66号(6ページ、2023年6月発行)

ボランティア ニュース第67号(6ページ、2023年9月発行)

ボランティア ニュース第68号(8ページ、2024年4月発行)

毎号500部~600部を発行。東京の北大オフィスにも送っている。

ボランティア ニュース編集委員会(星野フサ(委員長)・今井久益・久末進一・山岸博子)を適時開催し、年4回(3月、6月、9月、12月)の定期発行ではなかったが、3回発行した。

(5) ボランティアグループ連絡会

1~2か月に1回の割合で火曜日あるいは金曜日の午後1時30分からS224で開催した。

(6) 各グループの状況(2024年5月31日現在のボランティア登録者数は15グループ、240名)

植物・菌類(37名)、昆虫(23名)、考古学(37名)、メディア(2名)、化石(28名)、北大の歴史(5名)、展示解説(16名)、遠友夜学校(9名)、

4Dシアター (15名)、チェンバロ (11名)、
図書室業務 (12名)、第2農場 (13名)、ハンズ
オン (7名)、きたみてガーデン (8名)、地学 (17
名)

2. 2024年度 (2024年4月1日～2025年3月31日) の活動 予定

各指導教員のもとでグループ活動を行うとともに
ボランティアどうしの交流をさらに深める。

(1) 全体の活動

勉強会 (ボランティア談話会・博物館へ押しかけ
よう会など) および懇親会を適時開催する。

(2) ボランティア ニュースの発行

年4回の定期発行に戻す努力をする。各グループ
の活動の報告記事を強化する。

3. 2024年度グループ連絡会

在田、星野、新妻、外山、石田、山岸
メンバー募集しています。

ビデオ鑑賞会 (14:00～15:00)

毎年総会後には講演会を行なっているが、今年度
は総合博物館 1 階北階段そばの大型ディスプレイで
常時上映されている、教員・研究員による総合博物館
のすごい標本およびバックヤード紹介のビデオ12編
(各2分～5分) を鑑賞した。皆さんそれぞれに蘊蓄
を語り、面白い内容であるが、私たちボランティアは
落ち着いて見たことがないので、好評であった。



原稿の打ち合わせ

右側より伊福部達さん・石川・山岸・在田先生

平成遠友夜学校

～北海道大学遠友学舎にて毎週火曜日 18:00 開講～

「平成遠友夜学校」は、「札幌遠友夜学校」の精神を引継ぎ、2005年より北大生・北大教授その他の方々に講師をお願いして、毎週火曜日に北海道大学遠友学舎で、どなたでも無料で参加できる講義を開講しています。いつからでも参加 (受講) できます。参加の予約はいりません。気軽にお立ち寄りください。

校長 藤田正一 (北海道大学名誉教授・元副学長)

運営 北海道大学学生ボランティア

日時 祝祭日を除く、毎週火曜日 18:00 (最大延長 21:00 まで)

場所 北海道大学 遠友学舎 (北 18 条西 7 丁目)

受講費 無料 (お茶代等も徴収しないことを原則とし、金額自由、無名の寄付でまかっています。)

お問い合わせ : kt3s-fjt@asahi-net.or.jp 藤田まで

ホームページ : <http://enyuyagakkou.web.fc2.com/top.html>

主催 : 平成遠友夜学校運営部 後援 : 北海道大学総合博物館

講演「ゴジラ音楽と緊急地震速報チャイム」を聴いて

北海道大学農学院修士1年 石川 弘晃

2024年7月19日、北大総合博物館1階「知の交流ホール」にて、第34回ボランティアの会の談話会が開催され、伊福部達氏による講演「ゴジラ音楽と緊急地震速報チャイム」があった。拝聴した内容について以下に記す。

演者の伊福部氏は2007年にNHKから依頼を受け、緊急地震速報で流れる「チャララン・チャララン」のチャイム音を作成した。この緊急地震速報チャイムが作成される経緯・背景には、伊福部氏が福祉工学分野の開拓者であること、ピウスツキ蠟管の再生プロジェクトや、彼の叔父にあたりゴジラ音楽などで著名な伊福部昭の音楽など、様々なことが関わっているという。

まず、なぜ緊急地震速報チャイムに福祉工学なのかということについて説明する。福祉工学というのは人々の生活の快適さを向上することを目標とし、人間の潜在能力を考慮した上で工学的な支援をする技術のことである。例えば、補聴器、発声器、音声からの文字起こしなど、五感や各種動作を補助する技術が福祉工学の分野に含まれる。

緊急地震速報チャイムには、聴覚障がい者を含め多くの人に聞こえること、注意を喚起しつつも不安感を与えすぎない、といった要素が求められる。そこで、福祉工学の開拓者で、いわば聴覚障がいや発声障がいなどの専門家でもあった伊福部氏に依頼が舞い込んできた。

依頼者はNHKが1983年にピウスツキ蠟管プロジェクトのドキュメンタリーを放映した際の番組スタッフの一人であった。ピウスツキ蠟管とはポーランドの文化人類学者プロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)が1900年前後に樺太を訪れた際に残した、当時の音記録媒体である蠟管のことである。本総合博物館にそのレプリカが展示されている。ピウスツキは蠟管に樺太アイヌの音声を記録しており、その再生プロジェクトに関わった伊福部氏は、100年前のアイヌの歌(ユーカラ)を再生することに成功した。

アイヌの音楽という点において、緊急地震速報のチャイム音が関わってくる。伊福部氏はチャイム音を作成する際に、叔父の伊福部昭の音楽素材を使用した。その理由として、著作権的な問題がクリアしやすいということがあった一方で、アイヌ音楽に影響を受けた叔父の音楽を残すことができるという考えもあったという。使用した音楽素材は、伊福部昭作曲「シンフォニア・タプカーラ」(1954)より第3楽章の冒頭部である。この曲はゴジラ映画のための音楽ではなく、れっきとした純音楽であり、アイヌの熊祭りに着想を得て作曲された交響曲である。

チャイム音作成にあたっては、その音楽素材をそのまま用いたわけではなく、福祉工学的な発想が盛り込まれている。緊急地震速報に必要な注意を喚起する、という要素は人やサル「キヤー」という叫び声を参考にしたという。「キヤー」は低い音から急激に音の高さが上昇するという特徴を持ち、チャイム音においては音高が時間とともに順々に変化するアルペジオとして援用した。加えて、順に音高を上げるのか、下げるのか、二回同じフレーズを繰り返すか、二回目は半音上げるのかといったような様々なタイプのチャイム音の案を作成した上で、聴覚障がい者や子供などを含めた比較テストを行った。このような経緯によって現在の緊急地震速報チャイム音「チャララン・チャララン」が生まれたとのことである。

今後、緊急地震速報を聞くたびに、以上のような話が脳裏をかすめるような気がしてならない。

講演で拝聴したすべての内容に触れることはできなかったが、より詳しい内容が伊福部達監修、筒井信介著「ゴジラ音楽と緊急地震速報」(ヤマハミュージックメディア, 2012)として書籍が出版されている。

本稿を読んで興味が湧いた方は是非ご一読を。

ドキュメンタリー映画「新渡戸の夢」を鑑賞して

平成遠友夜学校生徒 橋本修一

この映画の上映について、平成遠友夜学校の生徒は私だけではなく恐らく誰もが楽しみにしていたと思われる。もともと私はクラーク博士や新渡戸稲造、内村鑑三の生き方や思想について学びたいという思いがあって時々休みながらではあるが、遠友夜学校に通い続けている。ところでシアターキノでの上映日で、まず驚いたのは映画を見ようと集まった人々の多さである。予想通り当日入場ができない方があった。しかし結果的には好評を博し1週間上映が延長になった。嬉しい限りである。

さて本論に入りたい。このドキュメンタリー映画は4年を費やして作成されたとのことだ。映画を見て感動することの多い中で今でも新渡戸の教育哲学は生きているということを実感した。私達は遠友夜学校で藤田校長から教育が人づくりであることを再三学んでいる。いかに国にとって教育が大切か。この教育はもちろん受験戦争に勝ち抜くための教育ではない。富や名誉より人格形成を重んじた教育に他ならない。「教育って何だろう」←「生きるって何だろう」と考えさせられる内容だ。新渡戸が学費もいらない、年齢も性別も問わない、教師も学生ボランティアで行うという精神で遠友夜学校を創設したのはまさに小さき者、弱き者、貧しき者に寄り添った新渡戸夫妻の精神そのものであったような気がする。富や名誉、社会的地位の高さばかりが生きる価値のあるように思わせる昨今、新渡戸の精神はむしろ新しく私達の目を覚ますような気がしてならない。清く、正しく、そして優しく、ある時は美しくと言っても言い過ぎではないような気がする。「学問より実行」、これは新渡戸の言葉だ。遠友夜学校の生徒である私達は藤田校長よりこの言葉の意味を習う。私利私欲のために生き立身出世をするのではなく、人類社会に対して善をなさんとする欲求のことに教わる。「志欲大なるべし」、この言葉はクラーク博士が語った「Boys, Be Ambitious」の最初の日本語訳である可能性が高いと言われている。あく

までも自らのためではない。弱者の側に立つことである。

「私欲と志欲」の違い、発音こそ同じだが意味は全く異なる。私達遠友夜学校の生徒はこのクラーク博士の言葉、新渡戸稲造の言葉を繰り返し、繰り返し学ぶ。何度も校長から聞いた内容だ。しかし何故か毎回新鮮な響きに聞こえる。それは少なくとも私自身クラーク博士の言葉も新渡戸の言葉も身につけていない証左だ。北大の寮歌「都ぞ弥生」の1番の歌詞に「人の世の清き国ぞとあこがれぬ」とある。人は元来正しく、清く、優しいものにあこがれるのだろうか。毎回遠友夜学校の帰り道、車を運転しながら学び舎（北大）に灯る明かりを見ながら胸が熱くなり時に涙する時もある。

もっと正しく、優しく、清く生きなければと繰り返し思う。「新渡戸の夢」の実現、それは夜間中学、遠友夜学校。私達は何としてもこの精神の道場を継承していかなければならない。そして多くの方々を知っていただきたい。政治評論家の森田氏は札幌での講演の最後に「北海道には札幌農学校が生んだ国際人新渡戸稲造、内村鑑三がいたではないか」と結ばれた。私にとっては忘れられない言葉だ。私達道民だけではなく心に留めたい。

かつてある総理大臣が日本を「美しい国」と称したが、今むしろ求められているのは「優しい国」ではないだろうか。映画を見終わって、何か自分にも小さな者ではあるが生きていく役割があるように思えた。パンフレットの表紙には「～学ぶことは生きる証～」とある。「新渡戸の夢」の映画を見終えて私は生きることの夢や目標や勇気が与えられたような気がする。そして新渡戸稲造を知らない多くの方々に新渡戸の夢、夜間中学、遠友夜学校をお伝えしたい。まずは毎週火曜日午後6時遠友学舎で行われている「平成遠友夜学校」の扉を是非叩いていただきたい。そして共に学び、共に生きたい。

大雪山産クモイリンドウの発見と命名の経緯

植物ボランティア 吉中 弘介

五十嵐父子の標本の発見

昨年のことですが、キノコの五十嵐恒夫氏（北大名誉教授）のお父上である五十嵐成八氏が採集された植物標本が、北大構内の古い建物から見つかりました。この中にはご子息の恒夫氏本人が学生時代に採集したと思われる標本も含まれていましたが、多くは成八氏が採集したものであり、共に総合博物館の陸上植物標本収蔵庫に収められることになりました。これらの標本がなぜこれまで放置されていたのか、その経緯は不明です。

この標本の点検作業を進めたところ、成八氏が採集した標本の採集地は旭川近郊と大雪山系がほとんどを占めており、恒夫氏の採集地は札幌近郊の山やアポイ岳や夕張岳などでした。

古新聞に挟み込まれたままの標本と台紙に固定されてラベルも添付されたものが混在しています。

成八氏採集標本の中に採集者が小泉秀雄となっている大雪山と羊蹄山で採集された標本がありました。この標本は成八氏が小泉から譲り受けたものと思われます。「大雪山の父」と言われている小泉秀雄と五十嵐成八氏とはどういう関係があったのか、興味を惹かれ調べてみました。これまでに分かったことを記してみたいと思います。

五十嵐成八と小泉秀雄との関係

五十嵐成八氏については、五十嵐恒夫氏が「ボランティアニュース No. 42、館脇 操先生小伝（第1回）」で次のように記しておられます。

「私の父成八（ジョウハチ）は、若いころ旭川の小学校につとめていたが、植物に興味を持ち大正時代に大雪山の高山植物も採集し、不明種は北大の宮部金吾先生に見てもらっていたようである。当時、大雪山高根ヶ原で採集したクモイリンドウは宮部・工藤両先生により、新種として発表され、*Gentiana igarashii* Miyabe et Kudo として学名にイガラシがつけられています。現在の

学名は *Gentiana algida* Pall. f. *igarashii* (Miyabe et Kudô) Toyok です。

小泉秀雄（1885～1945）はご存じの方も多いと思いますが、1911年に来道し、北海道庁立旭川中学校で博物科の教師を勤めながら、主に大雪山系の植物採集を含む学術調査登山を数多く行い、大雪山系の大半の山の命名に関わりました。日本山岳会会報『山岳』（第11年 第3号）に「大雪山登山記」（1917）を、同じく『山岳』（第12年 第2・3号）に256ページに亘る「北海道中央高地の地學的研究」（1918）を投稿し、国内に初めて大雪山系の学術的な全貌を紹介しました。

この論文の「緒言」の中に、執筆に当たり助力と便宜を受けた6名の中に友人として五十嵐成八の名を挙げています。余談ですが、この6名の中に小泉秀雄の実兄小泉源一（京都大学植物学教授・日本植物分類学会創始者）が入っていますが、後年兄源一とは新種の発表に絡み仲違いしています。

このように、小泉秀雄が著わした他の著作中にも五十嵐成八の名が同行者や協力者として登場してくることから、成八氏は小泉の調査登山に同行しており、また両者とも旭川で教師を務めていたことがあるなど、昵懇な間柄であったと思われます。なお、小泉の登山の同行者は五十嵐成八氏だけではなく営林署員・教職員仲間・友人などのグループでした。

小泉秀雄の年譜からの植物採集・調査登山の記録と、このたび収蔵された五十嵐成八氏の標本ラベルに記録されている採集年月日とを照合した結果、一致する日付が三つあり、収蔵標本からも同行登山が明らかになりました。

五十嵐成八氏は札幌農学校で農芸学を修められ、前記のボランティアニュースにあるとおり若い頃旭川で教師をされていて、この頃に小泉秀雄と出会い、同行登山が始まったと思われます。その後札幌鉄道局に入局されましたが、札幌に移った

後も小泉の調査に同行しています。また札幌では果樹苗木仕立販売を行っていたようで、当然高山植物も扱っていたと思われ、不明種は宮部金吾に見てもらっていたと恒夫氏は述べています。

小泉秀雄は1920年に離道し長野県松本女子師範学校博物科教諭となり、研究の対象を本州の山に移しているが、その後も大雪山などの本道の山に登っていて成八氏も同行している。また小泉は当時日本国領であった北方領土で調査を行っている。1929年にサハリン・国後島、1930年にはエトロフ島、1932年に北千島のパラムシロ島・アライト島・シュムシュ島に渡っているが、正式な調査記録は発表していないようです。

クモイリンドウのタイプ標本

先日、首藤光太郎先生にお願いして成八氏が大雪山で採集して命名に関わったクモイリンドウのタイプ標本を閲覧させて頂きました。このタイプ標本(図1)のラベル(図2・図3)から、成八氏と標本に関わる興味深い事柄が見えてきました。

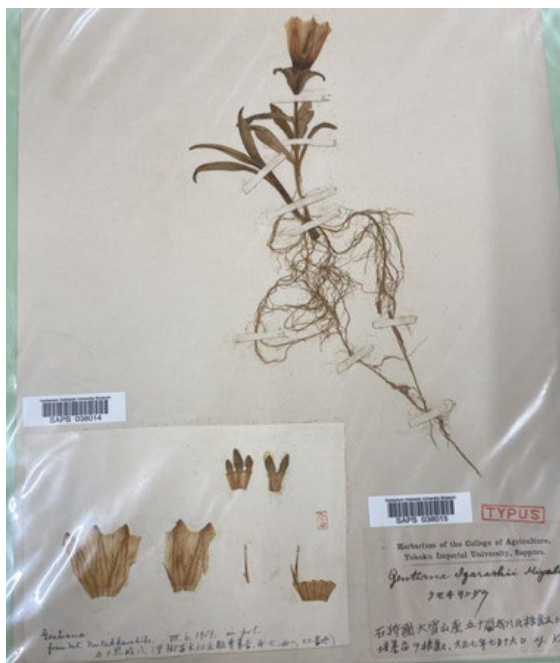


図1 クモイリンドウのタイプ標本

タイプ標本(図1)には植物体全体と花の花弁がくや萼のみを貼付した小紙片(図2)と、学名を記載したラベル(図3)が貼られています。



図2 図1の左下にある花卉や萼を貼付した小紙片

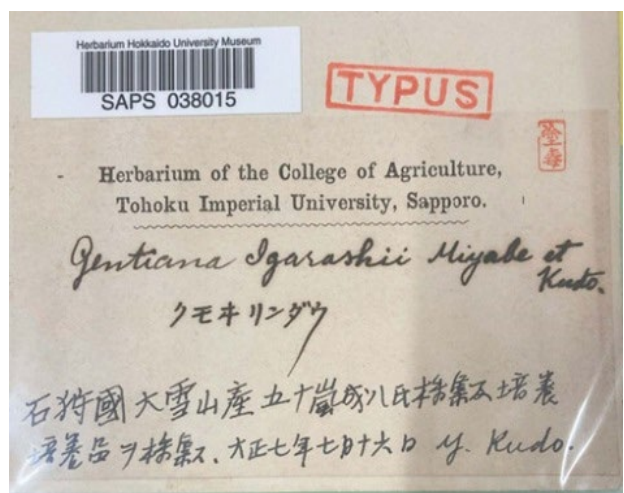


図3 図1の右下にある学名を記載したラベル

各ラベルに記された内容ですが、小紙片(図2)には「Gentiana from Mt. Nutak kaushube. VII. 6. 1917. in pot. 五十嵐成八(果樹苗木仕立販買業者.南七.西一.十三番地)」とあり、学名を記載したラベル(図3)には「Gentiana Igarashii Miyabe et Kudô. クモイリンドウ 石狩國大雪山産 五十嵐成八氏採集及培養 培養品ヲ採集ス.大正七年七月十六日 Y. Kudo.」とあります。

植物学者の米倉浩司氏が公開しているY Listのクモイリンドウの文献情報に次の記述があります。Type: Ishikari, Mt. Nutakkamshupe (S. Igarashi [with H. Koidzumi], [collected in 29 Jul. 1916, then cult. in Sapporo] Jul. 1917, SAPS).

ノート: タイプに関する情報は五十嵐成八「石井勇義(編), 山草と高山植物(実際園藝増刊): 65 (1932)」による。

1921年発行の札幌博物學會會報, Vol. VIII (図4)に宮部・工藤により新種記載されたクモイリンドウの発表文中に、「HAB. *Hokkaido*. Prov. *Ishikari*: Mt. *Nutakkamushube* (S. Igarashi July 1917)、¹⁾ 五十嵐成八」とあります。

これらの標本情報と文献情報から五十嵐成八氏が採集したクモイリンドウの新種記載に至るまでの経緯が次のように推量されます。

*1916年7月29日に小泉秀雄と同行した成八氏が *Nutakkamshupe* (大雪山) でリンドウの一種を採取し、札幌の自宅に持ち帰り鉢植えにする。

*1917年7月6日、成八氏採取の鉢植えの大雪山産リンドウの花を採取し、小台紙に貼付する(図2)。

*1918年7月16日、成八氏が育てていたリンドウを宮部・工藤が譲り受け、和名をクモイリンドウ、学名を *Gentiana Igarashii Miyabe et Kudô*. と記したラベル(図3)を貼付し、標本(図1)に仕立てる。種小名を *Igarashii* としたのは五十嵐成八に献名したためともと思われる。

*1921年発行の札幌博物學會會報(図4)に新種として記載する。

ボランティアニュースで五十嵐恒夫氏が書いているとおり、成八氏は宮部金吾と行き来があり、1916年に採集したリンドウを宮部に紹介し、高山植物の培養販売を業としている成八氏がそのまま育て、新種記載までの研究に必要な植物体を提供したものであると思われる。なお、図2の花の展開標本は工藤祐舜が作成したと思われ、図3のタイプ標本のラベルも学名の命名者が宮部・工藤となっていることから、宮部金吾の下で工藤が主に研究して新種記載に至ったものと推量されます。

五十嵐恒夫と植物標本

五十嵐恒夫氏と氏が採集した植物標本について少し触れておきます。1932年生まれの恒夫氏は北海道大学農学部林学科出身で、造林学・森林病理学の立場からの菌類の研究者であり、キノコ図鑑を刊行しています。高校時代は札幌東高等学校で生物部(当時はアドニス会)の初代部長に就いています。恒夫氏の標本の採集記録から採集地は高校時代の手稲山・無意根山・恵庭岳・樽前山などから始め、大雪山・アポイ岳・羊蹄山に及び、大学時代には礼文島で採集を行っています。

恒夫氏が学生時代に植物採集を行うに至ったのには、父上の成八氏の影響があり、高校に入った時に生物部の創設に関わったものと思われる。また残されている植物標本は学生時代のものだけです。採集した植物は台紙に貼り、学名などの情報を記入したラベルも貼付した標本もあるが、多くは採集して新聞紙にそのまま挟み込んでいる状態です。菌類の研究者となってからは維管束植物の採集はしていないのかも知れません。

おわりに

今回、図らずも五十嵐父子の植物標本が発見されてSAPSの収蔵庫に持ち込まれる事態になり、筆者らが整理を進める過程で興味を惹かれ、いろいろ調べたところ成八氏と小泉秀雄との交友関係や大雪山産の新種植物の記載に至る経緯などに触れることができました。

小泉秀雄と五十嵐成八氏については清水敏一著「大雪山の父・小泉秀雄」(2004)を参考にしました。

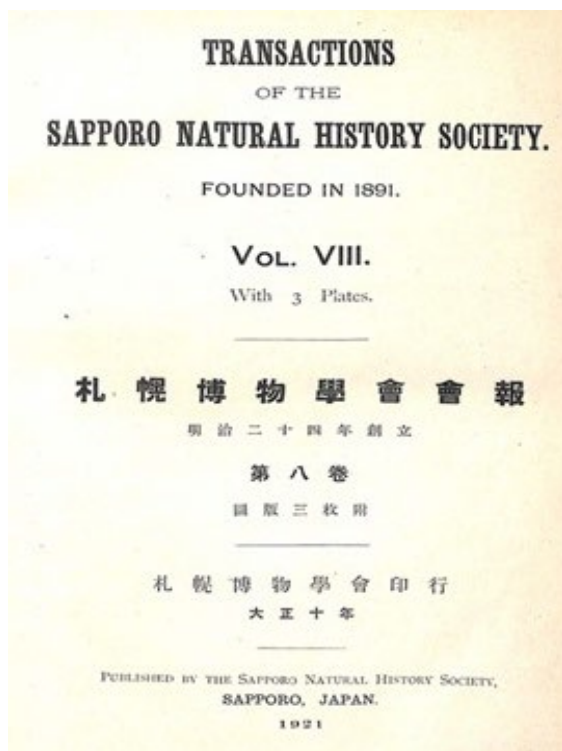


図4 札幌博物學會會報 第八卷

ポプラチェンバロ&バロックアンサンブル演奏会

チェンバロボランティア 松田 祥子

7月28日(日)午後、ポプラチェンバロとバロック楽器によるアンサンブル演奏会を行いました。

チェンバロは独特な音色が美しい鍵盤楽器で、素敵な独奏曲もたくさんありますが、ピアノと同様、他の楽器の伴奏を行うことも多いです。特に17～18世紀のバロック期ヨーロッパで盛んだった通奏低音という形態の伴奏を用いた音楽では、伴奏パートをチェンバロやオルガン、リュートといった和音の出せる楽器と、ヴィオラ・ダ・ガンバやチェロ、ファゴットといった低音楽器を組み合わせられて演奏されることが多く、上声パート部分をいろいろな楽器の組み合わせでたくさんの作品が残されています。

今回はチェンバロソロのほか、リコーダーとバロックヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバにチェンバロを用いたソロソナタやトリオソナタをいろいろ演奏しました。弦、笛、チェンバロ、それぞれの音色が面白く絡み合い、また、曲もドイツ、イタリア、ベルギー、フランスとさまざまな国のものを取り上げたので、雰囲気の違いも楽しめたのではないかと思います。

ポプラチェンバロは様式としてはイタリアンというタイプで、一般的には明るく硬質な音で、明快なイタリアの曲に合うイメージがありますが、北大総合博物館のポプラチェンバロは響きが柔かめのように、いろいろな国の曲の演奏にも合うように思えます。

当日は雨模様で、調律などのコンディションも心配でしたが、常日頃のメンテナンスのおかげで楽器の調子も良く、安定していました。会場も満席で、ポプラチェンバロの奏でる音楽がお好きな方が多くいらっしゃることを実感いたしました。

今後も、ポプラチェンバロを通じて、バロック期の美しい音楽をたくさんお届けできると嬉しいです。



左より池上依、新妻美紀、松田祥子、若松幸絵、稲川京子の皆さん



2004年の台風で倒れたポプラの木でチェンバロが作られた

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.69

- ◆編集人:北海道大学総合博物館 ボランティアの会(編集委員:星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2024年9月
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>